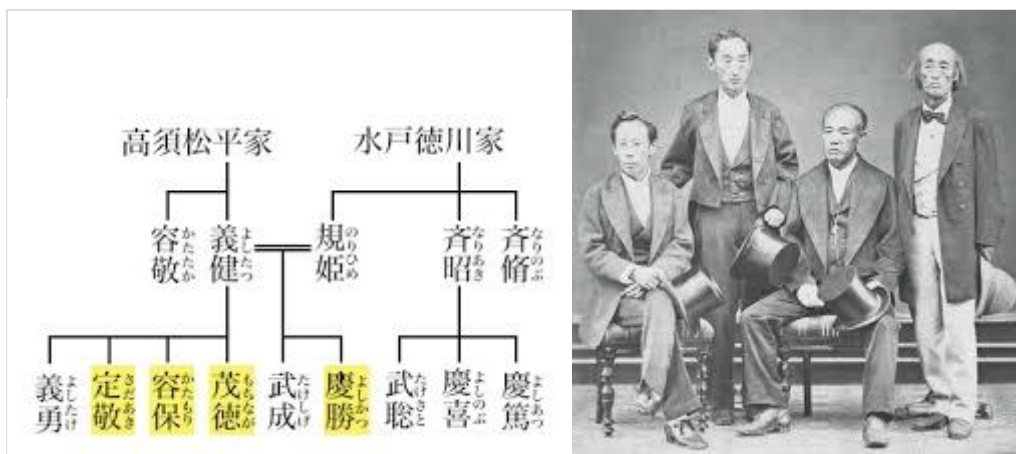


西濃会秋の散歩と会食～大垣共立銀行東京支店界隈(2019年9月7日)

◎桑名藩上屋敷跡(安政地図の「松平越中」)

高須四兄弟



幕末に京都守護職として徳川宗家を支えた合津藩主・松平容保(まつだいらかたもり)は、美濃高須藩(たかすはん)から養子に入った藩主である。

美濃高須藩は、江戸時代、美濃国石津郡高須(岐阜県海津市)付近を領有した藩で、尾張徳川家御連枝である事から江戸中期以降は尾張藩支藩である。立藩した藩祖は、御三家・尾張藩第二代藩主・徳川光友の二男・松平義行で、藩は小さいながらも神君・家康の血が流れていた。高須藩(三万石)の第十代藩主・松平義建(まつだいらよしたつ)には子が多く、息子達は、高須四兄弟(たかすよんきょうだい)を始めとして多くが幕末期に活躍した。

義建次男は尾張藩第十四代藩主・徳川慶勝となり、三男は石見浜田藩主・松平武成となり、五男は高須藩第十一代藩主・松平義比となった後に尾張藩第十五代藩主・徳川茂徳、さらに後には御三卿・一橋家当主・一橋茂栄となった。七男が幕末に活躍した会津藩主・松平容保(まつだいらかたもり)で、九男が桑名藩主・松平定敬(まつだいらさだあき)となり、十男・義勇は高須藩第十三代藩主となっている。つまり義建の子息達・高須四兄弟(たかすよんきょうだい)は、尾張藩藩主・徳川慶勝、一橋家当主・一橋茂栄(茂徳)、会津藩主・松平容保(まつだいらかたもり/京都守護職)、九男が桑名藩主・松平定敬(まつだいらさだあき/京都所司代)と、夫々(それぞれ)幕末から明治維新にかけてそれぞれ大きな役割を担い、歴史に名前を残している。

定敬は將軍徳川家茂と同じ弘化3年(1846年)生まれであったことから家茂と仲が良く、厚い信任を受けた。元治元年(1864年)には京都所司代に任命されるが、この際に若年であるからと拒絶したものの、実兄の容保が京都守護職にあったため拒絶しきれず就任した。定敬は容保と兄弟のコンビで兄を助けて京都の治安と西国の監視監督を務め、池田屋事件や禁門の変はこの兄弟の時代に起こっている。2回の長州征討や天狗党の乱でも京都の守備を務めた。京都において容保・定敬兄弟が禁裏御守衛総督となった一橋家当主徳川慶喜と協調

することで成立した政治体制は、一会桑政権と呼ばれる。

松平容保は、保科正之を藩祖とする会津松平藩九代目の藩主である。二代将軍・秀忠の庶子とされ、信州高遠の小大名で終わる筈だった正之は三代将軍・家光(保科の異腹兄弟)の引き立てで家康死後に徐々に出世を始め、最上山形城主を経て合津松平藩の初代に落ち着く。会津松平藩の初代となった保科正之は二十三万石に加え南山御蔵入領五万石も預かり実質二十八万石で格式御三家の水戸家を石高で上回っていた。その恩義に報いる為に、会津松平藩家訓「会津家訓十五箇条の第一条・会津藩たるは將軍家を守護すべき存在である」を定め、松平容保はその家訓を重んじて困難と反対も多い藩内を抑えて「京都守護職を引き受けた」と言われる。

◎堀部武庸(ほりべたけつね)寛文 10 年(1670 年)＝元禄 16 年 2 月 4 日(1703 年 3 月 20 日)赤穂浪士 47 士随一の剣客で吉良邸討ち入りの江戸急進派のリーダー

寛文 10 年(1670 年)、越後国新発田藩(現在の新潟県新発田市)溝口家家臣の中山弥次右衛門(200 石)の長男として新発田城下外ヶ輪中山邸にて誕生した。母は同藩士・溝口盛政の六女^[1]。姉が 3 人おり、長女・ちよは夭折、次女・きんは蒲原郡牛崎村の豪農の長井弥五左衛門に嫁ぎ、三女は溝口家家臣・町田新五左衛門に嫁いだ。

母は、武庸を出産した直後の同年 5 月に死去したため、しばらくは母方の祖母のところへ送られて、祖母を母代わりにして 3 歳まで育てられたが、祖母が死去すると再び父のところへ戻り、以降は男手ひとつで育てられる。しかし、武庸が 13 歳のときの天和 3 年(1683 年)、父は溝口家を追われて浪人となる(浪人については諸説あるが、櫓失火の責を負って藩を追われたという『世臣譜』にある説が有力とされる)。

浪人後、ほどなくして父が死去。孤児となった武庸は、はじめ母方の祖父・盛政に引き取られたが、盛政もその後 2 年ほどで死去したため、姉・きんの嫁ぎ先である長井家に引き取られた。元禄元年(1688 年)、19 歳になった武庸は、長井家の親戚・佐藤新五右衛門を頼って江戸へ出て、小石川牛天神下にある堀内正春の道場に入門した。天性の剣術の才で頭角をあらわし、すぐさま免許皆伝となって堀内道場の四天王(他の 3 人は奥田孫太夫、菱沼式兵衛、塩入主膳)と呼ばれるようになり、大名屋敷の出張稽古の依頼も沢山くるようになった。そのため収入も安定するようになり、元禄 3 年(1690 年)には、牛込天龍寺竹町(現・新宿区納戸町)に一戸建ての自宅を持った。

そのようななか、元禄 7 年 2 月 11 日(1694 年 3 月 6 日)、同門の菅野六郎左衛門(伊予国西条藩松平家家臣。武庸と親しく、甥叔父の義理を結んでいた)が、高田馬場で果し合いをする事になり、武庸は助太刀を買って出て、相手方 3 人を斬り倒した(高田馬場の決闘)。この決闘での武庸の活躍が「18 人斬り」として江戸で評判になり、これを知った赤穂浅野家家臣・堀部金丸が武庸との養子縁組を望んだ。初め武庸は、中山家を潰すわけにはいかないと断っていたが、金丸の思い入れは強く、ついには主君の浅野長矩に「堀部の家名は無く

なるが、それでも中山安兵衛を婿養子に迎えたい旨を言上した。長矩も噂の剣客・中山安兵衛に少なからず興味があったようで、閏5月26日(1694年7月18日)、中山姓のまま養子縁組してもよいという異例の許可を出した。これを聞いてさすがの武庸もついに折れ、中山姓のままという条件で堀部家の婿養子に入ることを決める。7月7日(8月27日)、金丸の娘・ほりと結婚して、金丸の婿養子、また浅野家家臣に列した。元禄10年(1697年)に金丸が隠居し、武庸が家督相続。このとき、武庸は先の約束に基づいて中山姓のままでもいはずであったが、堀部姓に変えている。譜代の臣下である堀部家の養子である武庸は家中では新参(外様の家臣)に分類されており、異例の養子入りであるから武庸は金丸の堀部家とは事実上別家扱いだったものと考えられる。赤穂藩での武庸は、200石の禄を受け、御使番、馬廻役となった。元禄11年(1698年)末には尾張藩主・徳川光友正室・千代姫(江戸幕府3代将軍・徳川家光長女)が死去し、諸藩大名が弔問の使者を尾張藩へ送ったが、長矩からの弔問の使者には武庸が選ばれ、尾張名古屋城へ赴いた。

ところが、元禄14年3月14日(1701年4月21日)、主君・長矩が江戸城松之大廊下で高家・吉良義央に刃傷に及び、長矩は即日切腹、赤穂浅野家は改易と決まった。武庸は江戸詰の藩士・奥田重盛(武具奉行・馬廻150石)、高田郡兵衛(馬廻200石)とともに赤穂へ赴き、国許の筆頭家老・大石良雄と面会。籠城さもなくば義央への仇討を主張したが、良雄からは浅野長広による浅野家再興を優先することを諭されて、赤穂城明け渡しを見届けた後、武庸らは江戸に戻るようになった。武庸はそれ以降も強硬に義央への敵討を主張。江戸急進派のリーダー格となり、京都山科に隠棲した良雄に対して江戸下向するよう書状を送り続けた。8月19日(9月21日)付けの書状では「亡君が命をかけた相手を見逃しては武士道は立たない。たとえ大学様に100万石が下されても兄君があのようなことになっては(浅野大学も)人前に出られないだろう」とまで主張。良雄は、武庸ら江戸急進派を鎮撫すべく、9月下旬に原元辰(300石足軽頭)、潮田高教(200石絵図奉行)、中村正辰(100石祐筆)らを江戸へ派遣、続いて進藤俊式(400石足軽頭)と大高忠雄(20石5人扶持腰物方)も江戸に派遣した。しかし彼らは全員武庸に論破されて急進派に加わったため、良雄自らが江戸へ下り、武庸たちを説得しなければならなくなった。元禄14年11月10日(1701年12月9日)、良雄と武庸は、江戸三田(東京都港区三田)の前川忠大夫宅で会談に及んだ。良雄は、一周忌となる元禄15年3月14日(1702年4月10日)の決行を武庸に約束して京都へと戻っていった。

しかし帰京した良雄は主君・長矩の一周忌が過ぎても決起はおろか江戸下向さえしようとしなかった。再び良雄と面会するために武庸は、元禄15年6月29日(1702年7月23日)に京都に入った。事と次第によっては良雄を切り捨てるつもりだったともいわれており、実際、武庸は大坂にもよって元辰を旗頭に仇討ちを決行しようと思っている。そのようななか、7月18日(8月11日)、長広の浅野宗家への永預けが決まり浅野家再興が絶望的となると、良雄も覚悟を決めた。京都円山に武庸も招いて会議を開き、明確に仇討ちを決定した。武庸はこの決

定を江戸の同志たちに伝えるべく、京都を出て、8月10日(9月1日)に江戸へ帰着し、12日(3日)には隅田川の舟上に同志たちを集めて会議し、京での決定を伝えた。

そして元禄15年12月14日(1703年1月30日)、良雄・武庸ら赤穂浪士四十七士は本所松阪の義央の屋敷へ討ち入った。武庸は裏門から突入し、大太刀を持って奮戦した。1時間あまりの戦いの末に赤穂浪士は義央を討ち取り、その本懐を遂げた。



討ち入り後、赤穂浪士たちは4つの大名家の屋敷にお預けとなり、武庸は良雄の嫡男・大石良金らとともに、伊予松山藩主・松平定直の江戸屋敷(大石主税良金ら十士切腹の地)へ預けられた。元禄16年2月4日(1703年3月20日)、幕府より赤穂浪士へ切腹が命じられ、屋敷にて松平家家臣・荒川十大夫の介錯により切腹した。享年34。主君・長矩と同じ江戸高輪の泉岳寺に葬られた。法名は刃雲輝剣信士。堀部家の名跡は親族の堀部言真が継ぎ、堀部家は熊本藩士として存続する。

◎銀行発祥の地

日本最初の近代的銀行である第一国立銀行は、明治6(1873)年、現在兜町ビルの所在する地(現みずほ銀行兜町支店)に誕生した。みずほ銀行兜町支店の入口脇の南側壁面には、「銀行発祥の地」のプレート(昭和38(1963)年製作)が嵌め込まれている。



◎郵便発祥の地

日本橋郵便局のある場所はまさに日本の郵便制度の起点であった場所で、前島密の胸像と郵便発祥の地を示す碑文が設置されている。

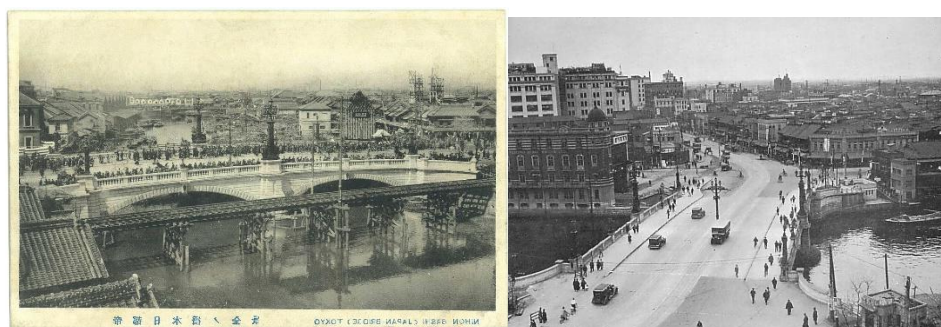


碑文には『ここは、明治4年3月1日(1871年4月20日)わが国に新式郵便制度が発足したとき 駅通司 と 東京の郵便役所(四日市郵便役所とも呼ばれ 現在の東京中央郵便局)が置かれたところです』と記されている。

もともとこの場所は旧幕府の魚河岸の魚を納めていた魚類御用屋敷があり、その屋敷を郵便事業をおこなう役所として改修された。建屋の柱は傾き、壁は崩れ、さらには中は狭くて肩と肩がぶつかるほど。その狭さゆえに自身の席を設けることができず、仕方なく押し入れの中棚を取り除いてそこを席にするしかないような状態であった。しかもその席は「暑中の夕日が頭の上に低い底を照り付けて 其の熱さは焼かれるが如く」とあり前島密にとっては狭いわ・暑いわ・しかも外は騒がしいわで散々だったようである。そういった状況でしかも周辺は火事も多い場所であったことから他の地域に移そうと考えたが、前島は、やはり郵便の要所として交通の利便性や立地、日本橋の発展性などを考えて他になく結局この地にとどまることを選んだ。

オンボロな状態のまま引き継いで使用していた魚類御用屋敷も新しい庁舎に改築することが決まり、明治7年4月に完成した。新庁舎(駅通寮)は擬洋風建築、つまりぱっと見は洋風建築でも日本在来の工法で造られた木造2階建の建物であった。上の記念切手に見られるようにバルコニーがあり、上の方には時計が取り付けられていた。残念ながら、この建物は明治21年2月に火事で焼失している。胸像は郵便創業90周年を記念して置かれたもの。

◎ 日本橋



日本橋は、東京都中央区の日本橋川に架かる国道の橋である。現在の橋梁は 1911 年に完成し、国の重要文化財である。また、日本の道路元標があり、日本の道路網の始点となっている。日本橋の名の由来について、江戸時代の『府内備考』で「此橋江戸の中央にして諸国よりの行程もここより定められるゝ故、日本橋の名あり」との記載が見られる。

現在の橋は 20 代目に当たるとされる。1903 年(明治 36 年)の市区改正計画により、幅 6 間以上の橋梁は鉄橋もしくは石橋を架設することに定められたため、木造だった以前の橋(明治 5 年築)に替わり、大都市東京にふさわしい新たな橋として 1908 年(明治 41 年)に着工、1911 年(明治 44 年)に完成した。石造二連アーチ橋で、橋の長さ 49 メートル (m)、幅 27 m、設計は米本晋一。橋柱の銘板にある「日本橋」の揮毫は徳川慶喜のもの。大正天皇は、現在の石橋に架け替えられた 2 年後に当たる 1913 年(大正 2 年)の作とされる漢詩「日本橋」の中で、「日本橋」の名は日本の道路の起点として名に恥じぬふさわしい風格を備えているという意味の橋を賞賛する詩を詠んでいる。

路面電車(後の都電)を通すことが決まっていた路面はわずかにアーチを描き、橋脚と橋台は山口県産の名石、側面は真壁石、アーチ部分と道路の表面は稲田石を使っている。内部は、最も荷重の掛かる両端がコンクリートで、さほど荷重の掛からない中央部分が煉瓦。推定寿命は 1000 年程度とされる。装飾顧問は妻木頼黄、装飾制作は東京美術学校、青銅像の原型製作は渡辺長男が担当した。西洋的な基本デザインに、麒麟と獅子の青銅像や一里塚を表す松や榎木を取り入れた柱模様など、日本的なモチーフを加えた和洋折衷の装飾になっている。麒麟像には日本の道路の起点となる日本橋から飛び立つというイメージから翼が付けられ、奈良県手向山八幡宮の狛犬やヨーロッパのライオン像などを参考にした獅子像は東京市の紋章を手に入れている。

◎貨幣博物館

貨幣博物館は、日本銀行金融研究所内の 2 階フロアに設置されている博物館。1982 年(昭和 57 年)に日本銀行創立 100 周年を記念して設置され、1985 年(昭和 60 年)11 月に開館した。日本銀行本店に隣接し、館内には古代から現在に至るまでの「日本の貨幣史」、世界の貨幣・紙幣を紹介する「さまざまな貨幣」、および「テーマ展示コーナー」からなる。発掘された貨幣や、軍票、記念硬貨などが順路毎に約 4000 点展示されている。また、1 億円分の紙幣の重さを体験出来るコーナーもある。日本銀行が収集してきた日本および国外の貨幣類と、田中啓文から寄贈された「錢幣館コレクション」がもとになっている。